

In April 2022, Osaka City University and Osaka Prefecture University
merge to Osaka Metropolitan University

佐藤義之氏の「心の哲学」批判に関するノート：心身問題から心心（身身）問題へ

佐金 武

Citation	アルケー. 30; 17-29.
Issue Date	2022-06
Type	Conference Paper
Textversion	Publisher
Description	関西哲学会第74回大会. 共同討議. 2021-10-23.
Rights	© Author.

Self-Archiving by Author(s)
Placed on: Osaka City University

佐金武. “心の哲学”批判に関するノート：心身問題から心心（身身）問題へ”. アルケー. 関西哲学会, 2022, p17-29, (関西哲学会年報, 30), 9784814004218.

共同討議／佐藤義之著「心の哲学」批判序説』をめぐって

佐藤義之氏の「心の哲学」批判に関するノート
— 心身問題から心身（身身）問題へ

佐
金
武

共同討議／佐藤義之著「心の哲学」批判序説」をめぐって

佐藤義之氏の「心の哲学」批判に関するノート

——心身問題から心身(身身)問題へ

佐金 武

1. はじめに——大陸哲学から見た「心の哲学」

われわれは赤信号を見て立ち止まり、青信号を見て横断歩道を渡る。しかし、私が見ている赤さや青さは本当に、あなたが見ている赤さや青さと同じだろうか。何が赤や青であるかについて意見が一致しながら、われわれの見ている色が実際には異なることはありうるだろうか……。子どもころ誰もが一度は不思議に思ったはずのこの問いこそ、現代哲学において意識の「ハード・プロブレム」と呼ばれる問題に係る。すなわち、心の振る舞いや傾向性、機能(心理学的意識)が同じでありながら、心に現れるもの(現象的意識)が異なることはありうるかという問題である。

さて、佐藤義之氏は、レイヴィナス研究をはじめとする、いわゆる「大陸哲学」(非英語圏のヨーロッパを主要な舞台とす

る哲学的伝統)分野の学者だ。その佐藤氏が、意識をめぐる「分析哲学」(英語圏を中心とするもう一つの哲学的伝統)の動向を痛烈に批判したのが、本稿でとりあげる『心の哲学』批判序説(以下『批判序説』)である。心の哲学に登場する大半の論者は、意識を消去するか、何らかの仕方でも物理的なものへ還元することを目論む「物理主義者」であるが、佐藤氏のメイン・ターゲットは反物理主義を標榜するD・チャーマーズだ。しかしながら、『批判序説』での佐藤氏の目論見は、チャーマーズを批判し物理主義を擁護することではない。そうではなく、物理主義と反物理主義が暗黙のうちには共有する、心の哲学の議論の枠組みそのものを疑うことなのである。⁽¹⁾

『批判序説』には鋭い指摘がたくさん見られるが、なかでも特筆すべきは次の二点である。まず、事実性を重視する現象学の立場にもとづき佐藤氏は、単なる論理的可能性にすぎない思考実験を多用する、心の哲学のその方法論に批判の矛

先を向ける。分析哲学の方法論上の難点に関するこの指摘はアプローチの根本的相違として言及されるにすぎず、管見の限り、『批判序説』のなかでそれ以上の実質的な議論が展開される箇所はない。だが本稿で私は、この論点を（佐藤氏の意図とは逆の方向に）さらに掘り下げ、心の哲学における現象学とは別のもう一つの企図を、意識の形而上学として特徴づけたうえで、可能な限りその擁護を試みる（第2節）。

『批判序説』ではまた、心の哲学が当然のように前提とする、現象的意識と心理学的意識の断絶にも批判の目が向けられる。佐藤氏によれば、現象的意識は心理学的意識に影響を及ぼしうるのであり、これこそが進化の過程で獲得されたその存在意義に他ならない。意識に関するこうした進化論的説明には疑問の余地があると感ずる一方、それと同時に、両者の断絶を強調しすぎることにも深刻な問題があると私は思う。とりわけ、私自身がこれまで心身問題を解決しうる有望なオプションと考えてきた「ラッセルの一元論」に関して、意図から分断された意志という考えは新たなハード・プロブレムを生じさせるかもしれないことを示唆するつもりである（第3節）。

2. 現象学と意識の形而上学

分析哲学の多くの議論はたしかに、単なる論理的可能性を

偏重しているように見える。もしもこの世界が培養槽のなかの脳が見ている夢だとしたら……。地球そっくりの双子地球が存在し、その地表は物理的組成がまったく異なる水らしきもので満たされているとしたら……。モノクロの部屋で育った色彩に関する物理学者がある日、鮮やかな赤いバラを見たとしたら……。私の見ている赤が実はあなたが「青」と呼ぶものだとしたら……。私の完全な物理的複製がどこかで誕生し、彼には意識が欠けているとしたら……。たとえ論理的に可能であるとしても、このようなありそうもない「思考実験」にもとづく議論にどれほどの説得力があるというのか。

佐藤氏は『批判序説』の冒頭部分で、次のように述べている。

事実性重視の現象学を私も信奉するが、その立場に立てば、思考実験を主要な方法のひとつとし、「論理的可能性」に頼る心の哲学の議論の進め方に大きな違和感を感じる。……私にとって重要なのは、私と同様の人間的条件をもつものにとつてのそれら「意識や知覚、世界等々」であり、仮想的な動物の、あるいは動物でさえない理性にとつての意識、知覚、世界ではないだろう。【佐藤 2020: 11】

おそらく、佐藤氏と同じような違和感を覚える読者も少なくないはずだ。以下、本節では心の哲学の企図を明らかにしつつ、意識の本性を説明するうえで思考実験がなぜ重要な探究

方法の一つとみなされるかについて、私なりに弁護を試みた
と思う。

心に関する探究を行う際、目的も方法も異なる二つのア
プローチを区別すべきだ。その一つは、事物はどのよう
に現れるか（世界はどう見えるか）をありのままに捉えようとする
現象学である。現象学においては、世界は培養槽のなかの脳
が見る夢かもしれないという夢仮説や、意識を欠いた自分の
物理的複製が可能であるというゾンビ仮説はそもそも問題に
ならない。現象の背後に潜む、こうした突飛な可能性を暴露
することは現象学の目的ではない。むしろ、この種のシナリ
オの真偽を判断中止（エポケー）し、現われの構造をつぶさ
に記述することこそ、現象学の方法への第一歩といふべきだ
ろう。

だが、心に関する探究は現象学に尽くされない。もう一つ
のアプローチは、意識の形而上学とも呼ぶべきもので、意
識とは何か（心を世界のどこに位置づけるべきか）を問題とす
る。ただし、意識が現にどうであるかではなく、意識の本質
を明らかにすることがこの探究の目的である。それゆえ、培
養槽のなかの脳やゾンビの可能性について考えることは、意
識の形而上学にとって重要な方法の一つだろう。なぜなら、
本質を解明するためには、現実だけでなく様々な可能性（ど
うありうるか）を考慮する必要があるからだ。どんな奇抜な

シナリオも思考可能である限り、根拠なしに無視されてよい
ものではない。

二つのアプローチがそれぞれどのような射程をもつかに
関して様々な見解の相違はあるかもしれないとはいえ、この区
別は分析哲学にも大陸哲学にも共通して存在するはずだ。私
見では、分析哲学は現象学の対象を意識現象に限定し、心身
問題を典型とする物理主義と反物理主義の論争を形而上学の
範疇と捉える傾向が強いように感じる。大陸哲学はどうだろ
う。この点について、私は軽々に判断できる知見をもちあわ
せていない。しかし、仮に現象学が果たす役割が期待される
よりもずっと大きいとしても、それにより直ちに、意識の本
質を探究する形而上学が居場所を失うわけではない。

さて一般に、考慮される可能性の範囲が広ければ広いほど、
本質の探究はより堅固なものとなる。そして、形而上学者は
意識の本質をできる限り明確に見定めたいと考えている。他
方、意識の形而上学に独自の領域を認めながら、そのような
探究に過度の要求をしないとするかどうか。この場合、思考
実験には一定の有用性を認めつつ、あまりにも突飛な可能性
を考慮しても意味がないといえるかもしれない。だが、果た
してそうだろうか。まず指摘すべきは、一見したところ可能
に思われるものが実はそうではないと論証することと、そう
した可能性を単に無視することはまったく異なるという点で

ある。考慮される可能性が突飛であることは、それを無視してよい根拠にはならない。事実、科学におけるいくつかの重要な発見は、われわれ人間の想像を遥かに超えていたのである。

一見したところ可能に思われるものが本当にそうであるかどうかは、改めて検討すべき哲学上の問題である。たとえば、ゾンビ仮説を批判する物理主義者は、意識を欠いた自分の物理的複製という考えはそもそも不整合だと主張するかもしれない。その議論によれば、物的なもの本質上、心的なもの何らかの仕方決定する（後者が前者に必然的に付随するか、両者は同一である）ゆえに、意識をもたないゾンビが存在するという想定は成り立たない。反物理主義者は当然、そうではないと応じるだろう。物的なものとの心的なものとの間に物理主義者が考えるような決定関係はなく、したがって、ゾンビの可能性は論理的にも形而上学的にも排除されない。このように見れば、ゾンビ仮説それ自体が、心的なものとの物的なもの本質上、重要な問題を提起しているように思われる。「事実性重視の現象学」に立脚することは、こうした形而上学上の問題を消し去りはしないし、またそれを無視してよい特権が得られたことを意味するわけでもない。ゾンビの可能性は確かに突飛に見える。だがしかし、それにについて考えることは、「仮想的な動物の、あるいは動物でさえ

ない理性にとつての意識、知覚、世界」を空想することではない。むしろそこでは、心的なものとの物的なもの本質が問題とされているのである。次節では、意識の形而上学として心身問題を捉え、ラッセルの一元論の考えを紹介したうえで、『批判序説』における佐藤氏のもう一つの重要な主張とオーバースラップさせながら両者を批判的に検討する。

3. 心身問題から心（身）問題へ

本節ではまず、私自身がこれまで心身問題を解決しようる有望なオプシオンと考えてきたラッセルの一元論について、議論に必要な範囲で概説する。その下準備として、定言的性質と仮言的性質の区別を導入し、「カテゴリーカリズム」の立場とそこから帰結する「クイディティ (quiddity)」の可能性について言及する。これを踏まえて、物理的性質の定言的基礎という考えがどのように心身問題の解決につながるかを概観する。ただし、私は現在、このラッセルの一元論による解決には大きな難点があると考えている。それは、『批判序説』での佐藤氏のもう一つの重要な論点、すなわち、現象的意識（意識）は心理学的意識（意志）に影響を及ぼさうという主張と深く関わっている。

3. 1 定言的性質と仮言的性質

大雑把にいつて、仮言的性質とは対象の条件的、あるいは様相的、なあり方に關わる。仮言的性質のうちいわゆる傾向性は通常、反事實的条件法の観点から次のように分析される。

●対象 x が傾向性 D をもつのは、「仮に x がゆしたならば、 x は ψ するだろう」という反事實的条件法が成り立つときである。

つまり、傾向性はつねに顕在化しているわけではないが、刺激と顕現の反事實的な結びつきを観点から捉えられる。⁽³⁾ たとえば、砂糖が水溶性という傾向性をもつのは、「砂糖を水にいれたならば、それは溶けるだろう」といえるときである。この反事實的条件法が成り立つためには、砂糖が実際に水に溶けている必要はない。⁽⁴⁾

これに対して、仮言的でない性質は定言的性質と呼ばれ、ある瞬間における対象の顕在化したあり方に關わる。たとえば、形などの幾何学的性質は通常、定言的性質の典型とみなされる。何かが五角形であるならば、その性質は現にあらわれており、特定の刺激を条件とする傾向性ではないように思われる。(五角形であるという性質も、「角を数えれば五つある」のような条件法で解釈することもできないが、こ

した考えの妥当性についてのさらなる検討は差し控える。)

さて、定言的性質と仮言的性質はどのような關係にあるのだろうか。対立する二つの立場がある。カテゴリカリズムの考えでは、仮言的性質を含むすべての性質は定言的基礎をもつ。たとえば、砂糖がもつ水溶性という傾向性はその分子構造に基礎をもち、それは定言的性質と考えられる。こうした図式をすべての性質に当てはめるのがカテゴリカリズムである。カテゴリカリズムの否定は「傾向性主義」と呼ばれるが、これには二つのタイプがある。穩健な傾向性主義は、定言的性質その他に還元不可能な傾向性が存在すると主張する。これに対して、ラディカルな傾向性主義は、すべての性質は究極的には傾向性であると主張する。ただし、この先の議論に關連するのは主としてカテゴリカリズムであるので、いずれのタイプの傾向性主義についてもこれ以上は触れない。⁽⁵⁾

カテゴリカリズムの考えでは、傾向性をはじめとする仮言的性質は、何らかの定言的性質が自然法則における諸々の因果的・理論的役割を担うことにより現れる派生的な性質である。ここで、自然法則それ自体は、世界の諸現象や事物の振る舞いに見出される規則性のようなものと理解してよい。定言的性質が基礎となり、それらの間に一定の規則的關係が成り立つことで、どのような仮言的性質が存在するかが決まる。自然法則は偶然的(經驗的)側面をもつとするならば、定言

的性質と仮言的性質の結びつきも偶然的である。

比喩的にいえば、カテゴリリズムにおいて想定される定言的性質と仮言的性質の関係は、ドラマの役者とキャラクターの関係に似ている。役者が同じでも台本が異なれば、登場するキャラクターは異なる。逆に、同じキャラクターを異なる役者が演じることだってできる。これと同様に、定言的基礎が同じであつても、自然法則が異なれば、そこから派生する仮言的性質は異なり、様々な物理的対象は異なる振る舞いをするだろう。また、物理的対象の振る舞いを観察するだけでは、それがどのような定言的性質をもつかは決定することができない。観察される同じ傾向的役割を別の定言的性質が担うこともありうるからだ。

仮言的性質の基礎としての定言的性質はクイディティとも呼ばれる。クイディティとは特定の役割を担つたり担わなかつたりする性質それ自体としての「何性 (suchness)」であり、個物の「このもの性 (finess)」としばしば対比される。このもの主義によれば、まったく別物であるように見える個物がこのもの性において一致することや、完全にそっくりな個物がこのもの性において異なることはありうる。他方、クイディティズムによれば、同じ何性が異なる世界では異なる傾向的役割を担うことや、異なる何性が異なる世界では同じ傾向的役割を担うこともある。(ただし、こうした類比性は、

クイディティズムとこのもの主義が親和的であることを意味しない。)

さて、科学が扱う様々な物理的性質は本来的に傾向性である。たとえば、水溶性であることは水に溶ける傾向性として、電子であることは同じ電荷のものを斥ける傾向性として、また、質量をもつことは加速に抵抗する傾向性として記述することができる。科学における物理的性質はどれも特定の理論的役割を担い、それらの存在は何らかの物理的対象の振る舞いによつて検証されるのだから、そのような性質が本来的に傾向性であることは驚くに値しないだろう。

しかしそれは同時に、ある種の傾向性の定言的基礎は必ずしも、科学的に同定可能であるとは限らないことを示唆する。カテゴリリズムにしたがえば、たとえば、砂糖がもつ水溶性という傾向性は、その分子構造が定言的基礎となり、現実の自然法則における特定の役割を果たすことから派生すると考えられる。砂糖は内部構造をもつ複合物であるから、このような説明がもつともらしく聞こえる。だが、内部構造をもたない単純な対象の場合はどうか。電子がそのような対象であるとしてみよう。その場合、同じ電荷のものを斥けるといふ電子のもつ傾向性の定言的基礎とは何だろう。砂糖の分子構造に相当するそのような定言的性質は、電子を単純かつ基礎的な存在者とみなす科学理論には登場しないように思われ

る。

したがって、電子のような対象がもつ傾向性の定言的基礎は、科学においては（原理上）同定されないように思われる。（将来、さらにミクロなレベルが発見されれば、電子は内部構造をもたない単純者ではなかったことが判明するかもしれないが、真に小さな対象について同じ議論が成り立つだろう。）だとしても、カテゴリカリズム（もしくはクイディティズム）は、すべての傾向性に定言的基礎が存在すると主張する。この主張が正しいとすれば、科学的に同定可能な物理的性質に加えて、科学的に同定不可能な物理的性質も存在しなければならぬ。次に見るように、ラッセルの一元論は、この意味での物理的性質に心身問題を解く鍵を見出すのである。

3. 2 ラッセルの一元論

ラッセルの一元論とはラッセル [Russell 1927] に由来する考えで、心と身体がどうして一体のものでありうるか（あるいは、物理的な世界のなかで、心的なものがいかにして因果的効力をもちうるか）をめぐる、いわゆる心身問題に対する一つの見解として提示される。チャーマーズはこれをありうるオプションとして支持し、次のように説明する。

タイプF一元論「ラッセルの一元論」によれば、意識は、

基礎的な物理的存在者の内在的性質から、すなわち、基礎的な物理的傾向性のカテゴリカルな基盤から構成される。この見解においては、物理的実在の基礎的なレベルに、現象的あるいはプロト現象的な性質が存在しており、これらがある意味で物理的実在そのものの基礎となっている。

[Chalmers 2010: 133]

物理的傾向性と現象的意識に着目する限り、両者はあまりにも違うように見える。だが、すべての物理的性質は定言的基礎をもち、科学的探究が及ばない実在の根本的なレベルにおいて、それは同時に現象的性質であるかもしれない。ラッセルの一元論はこの可能性に賭けることにより、心身問題の解決を図るのである。

ここで、押さえておくべきことが少なくとも二点ある。第一に、実在の根本的なレベルにおいてとはいえ、ラッセルの一元論は物的なものと心的なものとの一致を主張するので、心身同一説の一形態であると考えられる。ただし、心的なものが物的なものに還元されるというような優先関係はなく、すべてのものは文字どおり、物的であるとともに心的である。それゆえ、この見解を「汎心論」に分類することもできる。第二に、物理的傾向性とその定言的基礎（これは現象的性質もしくはプロト現象的性質と同一）は明確に区別されており、

それゆえ、心身二元論の基本的な枠組みは維持される。というのも、心身二元論は通常、現象的意識（たとえば、痛み）は科学的に同定可能な物理的状态とは異なるといふ見解として理解されるからだ。

ラッセルの一元論では二元論的な直観が保たれる一方、意識を欠いた自分の物理的複製が可能であるというゾンビ仮説は否定される。チャーマーズは次のように説明する。

ラッセルの一元論が正しいとすれば、我々がゾンビについて考えるとき、我々は現実世界における物理的なシステムの構造的性質を固定しているが、それらの内在的性質（これがプロト現象的性質である）を固定していない。これらの内在的なプロト現象的性質を物理的性質とみなしてよいならば、我々が考えるゾンビは完全な物理的複製ではなく、完全な物理的複製はどれも現象的複製でもあることになるだろう。 [Chalmers 2010: 152]

ポイントは「物理的」の意味にある。科学的に同定可能な物理的状态（物理的なシステムの構造的性質）にその意味を限定するならば、ゾンビはたしかに思考可能に見える。というのも、同じ物理的状态でありながら、その定言的基礎が異なるため、一方には意識があり他方には意識がないような別別の状況を考えることができるからだ。しかし、「物理的」の意

味に定言的基礎を含めるならば、ゾンビはもはや思考可能ではない。なぜなら、ラッセルの一元論の考えにもとづけば、特定の物理的状态の定言的基礎をとりだすとき、それと同一の現象的性質ももれなく決定されることになるからである。⁽⁸⁾

長くなったが、以上でラッセルの一元論の説明は終わりである。第2節での議論を思い起こすならば、ラッセルの一元論はゾンビ仮説を単に無視するのではなく、それを排除する独自の形而上学的な根拠を提示している。そして、私はこれまで、この見解が心身問題を解決しうる有望なオプションであると考えてきた。だが、今はやや懐疑的である。その理由は、意識と意志の関係についての佐藤氏の考えと関連している。以下ではまず、佐藤氏の議論を批判的に検討した後、そうした批判がラッセルの一元論にとっては諸刃の剣となりうることも指摘する。

3. 3 定言的な意識と仮言的な意志をめぐって

私が見るところ、ラッセルの一元論は、心身問題の解決とひきかえに、心身問題および心身問題に直面する。心身問題とは物理的性質の傾向的役割とその定言的基礎の間の関係に関する問題であり、すでに見たように、ラッセルの一元論においてこれは解決すべき問題というよりはむしろ、心身問題を解決するための鍵であるともいえる。（とはいえ、同定不可

能な定言的性質の存在を示唆する点で、反カテゴリカリズムの立場からは受け入れたい対処に見えるだろう。他方、心・心問題とは定言的な意識と仮言的な意志の関係をめぐる問題であり、これから見る佐藤氏の議論とそれに対する本稿での批判を踏まえると、ラッセルの一元論だけでなく心の哲学全体が直面する一般的な問題であるといえるかもしれない。

まずは、意識と意志の関係に関する佐藤氏の主張を見てみよう。

つまり、論理的可能性のレベルではいざ知らず、少なくとも現実のこの宇宙において、現象的意識の存在意義は自由意志の行使に何らかの影響を与えることである。行動への影響なしでは、現象的意識が存在する生存適合性上の意義はなく、そのためのコストを顧みずに現象的意識を維持してきたはずがない。〔佐藤 2020: 321〕

ここには、『批判序説』のモチーフとなる重要な二つの論点
が明確に提示されている。その一つは、現象的意識は自由意志の行使に何らかの影響を及ぼすという主張である。そして、もう一つは、そうした影響こそが現象的意識の存在意義に他ならないという主張だ。佐藤氏によれば、自由意志に対する現象的意識の影響は、生存と適応に関わる否定できない事実である。

第二の論点から検討しよう。佐藤氏によれば、現象的意識が自由意志に何らかの影響を及ぼすことがないならば、生存適合性の観点から考えて、そのような意識に存在意義はない。この考えはしかし、現象的意識が存在しなければならぬこととの根拠としては不十分であると私は思う。この種の進化論的考察により明らかになるのはせいぜい、現象的意識には生存に適した何らかの機能があるということまでであり、そもそも現象的意識がなぜ存在したかは説明されない。つまり、意識の発生は謎のままだ。仮に現象的意識の適応上の有用性が示されたとしても、そうした説明は意識の存在を帰結するものではなく、したがって、ゾンビ仮説のようなシナリオを排除するには無力であるように思われる。

さらにまた、ここには大きな暗黙の前提があり、それは第一の論点と結びつく。佐藤氏によれば、現象的意識の存在意義とは、それが自由意志の行使に何らかの影響を与えることである。この主張はあきらかに「自由意志」の存在を前提としている。ところで、様々な可能性のなかで選択を行うという意味での自由意志はそれ自体、心の哲学と隣接する現代形而上学の別の分野において盛んに論じられる問題であり、哲学の歴史を通じて激しく議論されてきた一大テーマでもある。たしかに、自由意志の存在を擁護するリベタリアニズムのような立場はあるが、その考えが本当に維持可能かどうかは目

下係争中である。

しかしながら、本稿での私の関心は「自由」よりもむしろ「意志」の方にある。意志なるものが仮に存在するならば、それは心の振る舞いや傾向性、機能としての心理学的意識に分類されるだろう。顕在化した感覚や感じ、意識的な思考を現象的意識と呼ぶならば、信念やその他の様々な態度、そして行為に向かう心の状態としての意志は心理学的意識と呼ぶにふさわしい。ここで私が提起したいもつとも大きな問題は、現象学的に見て、意志とは何かということである。心理学的意識が行為の説明として要請される理由は分かる。だが、自らの内面を先入観なしに省みた場合、意志をはじめとする心理学意識ははたして、顕在化した現象的意識と同じリアリティをもつといえるだろうか。

そのように断言することは躊躇われる。というのも、現れているとおりの現象的意識とは異なり、意志をはじめとする心理学的意識はある種の潜在性や傾向性を伴う心の状態であり、そのような状態がそれ自体で意識的である（顕在化している）とはいえないからだ。たとえば、赤いバラを見ることと、それに手を伸ばそうとすることには大きな差がある。前者はそれ自体で意識的な知覚経験だが、後者はそうではないだろう。われわれは自分が特定の意志をもっていることに意識的になることはできるが、だからといって、そうした心の

状態（意志それ自体）が意識的であることにはならない。⁽⁹⁾

現象学的に見て、現象的意識と心理学的意識の間にはたしかに大きな溝がある。心に直接現れる現象的意識には抗いがたいリアリティがあるのに対して、意志をはじめとする心理学的意識にはどこか捉えようのなさを感じてしまふ。心理学的意識はもしかすると、他者や自分の行為を解釈するための枠組みにすぎないかもしれない。あるいは、それらの行為を説明するための図式であるかもしれない。もしそうであるなら、どんなに注意深く内観したとしても、意志それ自体を見出すことができないのは無理もない。

ここにおいて、相対する二つの領域で、定言的なものと仮言的なもののリアリティをめぐって、奇妙な逆転が生じているように見える。物的な領域において、諸々の傾向的役割や振る舞いが観察されることは否定できないが、そうした傾向性すべてに何らかの定言的基礎がなければならないというカテゴリカリズムの主張には議論の余地があるだろう。他方、心的な領域においては、定言的な意識の存在は疑いえないが、心的傾向性としての意志の出自はそれほど明らかではない。心身問題はこうして新たな局面を迎える。ラッセルの一元論が示唆するように、心身問題は物理的傾向性と定言的な意識の対立のなかで生じる。だがそれ以前に、物心それぞれの領域で、定言的なものと仮言的なものの看過できない断絶があ

るように思われる。

『批判序説』の検討を通じて私が得た教訓は、心身問題の核心は実のところ、心身(あるいは身身)問題なのではないかということだ。私の診断が正しければ、現象的意識は心理学的意識に影響を及ぼしうるといふ佐藤氏の主張とその論拠には、いくつかの大きな問題がある。しかし、この批判は翻つてラッセルの一元論にも当てはまるように思われる。心身問題が乗り越え可能であるのは、心身(身身)問題にすでに一定の決着がついた場合に限る。そうでなければ、心身問題の解決は単に混乱にもとづく幻影かもしれない。

4. おわりに——意志の現象学に向けて

本稿で私が述べてきたことは、ラッセルの一元論や佐藤氏の議論にとって致命的な批判とはならないだろう。むしろ、これらのアプローチを發展させ精緻化するための、大まかな方向性を指し示したにすぎない。とりわけ、心的な領域において、意志とは何かということや、意識はそれにどのように関わるかがさらに検討される必要がある。これらの問題を素通りし、意志の存在を前提として意識の有用性を主張するならば、問題の所在を見誤る恐れがある。私の見るところ、より大きな将来の課題の一つは、意志やその他の心理学的意識を現象学的に考察することだ。これこそ、佐藤氏と心の哲学

者が共同して取り組むべきテーマであるように思われる。

謝 辞

本稿は、関西哲学学会第74回大会・共同討議「佐藤義之著『心の哲学』批判序説」をめぐって」での発表をもとに執筆された。著者の佐藤義之氏とオーガナイザーの中畑正志氏、そして、当日の参加者から多くの有益な質問やコメントをいただいた。さらに、大畑浩志氏、高野保男氏、西澤徹臣氏、藤田明伸氏、雪本泰司氏には草稿を検討していただいた。ここに記して、感謝の意を表明する。

註

- (1) 佐藤氏の『批判序説』に関するここまでの紹介は、他所でのレビュー「佐金2020」を加筆修正のうえ再利用した。
- (2) 心の哲学において頻繁に言及されるこれらの思考実験のうち、培養槽のなかの脳についてはバトナム [Putnam 1982: 1-21]、双子地球についてはバトナム [Putnam 1975]、白黒のメアリーに関する「知識論証」についてはジャクソン [Jackson 1982]、逆転スペクトルと哲学的ゾンビの可能性についてはチャーマース [Chalmers 1996]を参照。
- (3) 傾向性の反事実的条件法による分析には多くの反例が指摘されているが、紙面の都合上、ここでは触れない。関連する諸問題に関心の向きは、オンライン上の『スタンフォード哲学百科事典』で閲覧可能な、チュエ [Chao 2018] による解説が役に立つ。
- (4) ちなみに、傾向性は力能(パワー)や潜在性(ポテンシャル)

とはほぼ同義であり、人の能力や徳に関しても、反事実的条件法による同様の分析が可能だ。

(5) 傾向性主義の体系的擁護とカテウロリズムに対する包括的批判については、たとえば、バード [Bird 2007] を参照せよ。

(6) いいかえれば、様々な傾向性の定言的基礎が何であるかは、観察を通じては知りえないかもしれないところだ。ルイス [Lewis 2008] は、こうした懐疑的な結論が導かれることをすすんで認める。他方、シャフナー [Schaffer 2004] によれば、定言的基礎に関する懐疑論は外界に関する一般的な懐疑論(たとえば、すべてが夢であるという仮説や、自分が培養槽のなかの脳であるという仮説)の変種にすぎず、それと同様の仕方に対処可能である。

(7) 実際、ルイス [Lewis 1986: sec. 4.4] はクイティティズムを支持し、このもの主義を拒否する。ただし、シャフナー [Schaffer 2004: 221] によれば、ルイスの反このもの主義は単なるこのもの性の否定ではなく、このもの性はクイティティにスーパーヴィンするところ、クイティティとして理解することができる。同様に、反クイティティズムは、何性は構造にスーパーヴィンするというクイティティとして表現することができる。

(8) ストルジャー [Stoljar 2001] は、科学理論において説明される物理的傾向性を「理論ベースの物理的性質」と呼び、その定言的基礎を含む物理的対象の内在的本性を「対象ベースの物理的性質」と呼ぶ。

(9) 意識と意志の相違に関わる(1)での考察は、思考と信念についてのクレイン [Crain 2001: ch.4] の議論にインスパイアされた部分が大々い。それによれば、思考はそれ自体で意識的な出来事であるが、信念は傾向性を伴う心の状態であり、意識的な信念などは存在しない。(ただし、心配のように、状態でも出来事でもありうるような例も存在する。この点に関していえば、意志は心配よりも信念に近いのではないかと私は思う。)

引用文献

- Bird, A. (2007) *Nature's Metaphysics*. New York: Oxford University Press.
- Chalmers, D. J. (1996) *The Conscious Mind*. New York: Oxford University Press. (D. J. チャーブーズ (著)『意識する心』林一 (訳)『白鷺社』2001年)
- Chalmers, D. J. (2010) *The Character of Consciousness*. New York: Oxford University Press. (D. J. チャーブーズ (著)『意識の諸相』太田敏中・源河亨・佐金武・佐藤亮司・前田高弘・山口尚 (訳)『春秋社』2016年)
- Choi, S. (2018) "Disposition", in *Stanford Encyclopedia of Philosophy*, <https://plato.stanford.edu/entries/dispositions/> (2022年1月20日閲覧)。
- Crain, T. (2001) *Elements of Mind*. New York: Oxford University Press. (T. クレイン (著)『心の哲学』植原亮 (訳)『勁草書房』2010年)
- Jackson, F. (1982) "Epiphenomenal Qualia", *Philosophical Quarterly* 32: 127-136.
- Lewis, D. (1986) *On the Plurality of Worlds*. Oxford: Blackwell. (D. ルイス (著)『世界の複数性』(2017) 出口康夫・佐金武・小山虎・海田大輔・山口尚 (訳) 名古屋大学出版会 2016年)
- Lewis, D. (2008) "Ramseyan Humility" in *Conceptual Analysis and Philosophical Naturalism*, D. Braddon-Mitchell and R. Nola (eds.), Cambridge, MA: The MIT Press, 203-222.
- Punam, H. (1975) "The Meaning of "Meaning"", in *Mind, Language, and Reality*. Cambridge: Cambridge University Press, 215-271. (H. パンナム (著)『精神と世界に関する方法』収録 藤川吉美 (訳) 紀伊国屋書店 1975年)

- Putnam, H. (1982) *Reason, Truth, and History*. Cambridge: Cambridge University. (日・バトナム (著) 『理性・真理・歴史』収録、野本和幸・中川大・三上勝生・金子洋之 (訳)、法政大学出版局、1994年)
- Russell, B. (1927) *The Analysis of Matter*. London: Kegan Paul.
- 佐金武 (2020) 「心身問題から心問題へ」『週刊読書人』第 3346号：4頁。
- 佐藤義之 (2020) 「心の哲学」批判序説『講談社選書メチエ』。
- Schaffer, J. (2004) "Quiddistic Knowledge", in *Levinian Themes*. F. Jackson and G. Priest (eds), New York: Oxford University Press, 210-230.
- Stojjar, D. (2001) "Two Conceptions of the Physical", *Philosophy and Phenomenological Research* 62: 253-281.